

2026年度

湘南白百合学園中学校

入学試験問題

国語

45分

|      |  |    |  |
|------|--|----|--|
| 受験番号 |  | 氏名 |  |
|------|--|----|--|

○受験番号・氏名は解答用紙にも書くこと。

後の問いに答えなさい。

\*答えは解答用紙に書きなさい。

問一 次の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- ① 駅のカイサツ。
- ② 飛行機がチャクリクした。
- ③ 空気中のサンソ。
- ④ 木の根がハる。
- ⑤ 人口のゾウゲン。
- ⑥ 骨太の構造。
- ⑦ 春分の日。
- ⑧ 関東以西の地方。
- ⑨ 危ない状態。
- ⑩ 平和宣言の言葉。

問二 次の言葉は慣用句の一部です。それぞれの言葉につながるものとしてふさわしい語句を後の語群から選び、記号で答えなさい。  
(記号の使用は一回のみ)。

- ① 相づち
  - ② 白黒
  - ③ 途方とほう
  - ④ とてつ
- 《語群》 ア に暮れる      イ もない      ウ をうつ      エ をつける

問三 次の文章は『池上彰あきらと学ぶ メディアのめ』(NHK「メディアのめ」制作班 池上彰)から引用したものです。よく読んで後の問いに答えなさい。

**A** の記事の見出しは『近江(おうみ)猛襲(もうしゅう)14安打』。「猛襲」は激しく襲おそいかかるという意味です。そして、『全員でつなぐ「結実」という見出しもありますから、「近江高校が選手全員の方で、打って、打って、打ちまくって勝利した」ということが伝わってきますよね。写真も、勝敗を分けた4回の攻撃こうげきで、キャプテンがヒットを放った瞬間しゅんかんが使われています。

いっぽう、**B** の記事は、『高崎(たかさき)』『初戦突破(しょせんとっぱ)ならず』という見出しで、高崎高校が負けたことはわかる



(1)  ① ·  ② に入る言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア ① 複数の ② 写真
- イ ① 同じ ② ちがひ
- ウ ① ちがう ② 共通点
- エ ① 同じ ② 情報

(2) 一部『一番知りたい』とと思っていることを伝えようとして、新聞社の人たちは記事をつくった」とありますが、新聞記事の作り方に関して別の部分には次のように書かれています。空らんには同じ言葉が入ります。最もふさわしいものを後の語群から選び、記号で答えなさい。

同じ試合を報道しているにもかかわらず、かなりちがった印象を受ける記事になっていましたよね。このことからわかるように、新聞は出来事を正確に伝えるメディアではありませんが、人が立場で記事を書いていることを覚えておいてください。

《語群》

- ア 公平な
- イ 一般的ないっぱんてき
- ウ いろいろな
- エ 大多数の

(3) 新聞記事①、②は、北海道の釧路市動物園くしろしで飼育されている、後ろ脚あしに障害のあるメスのアムールトラのココアに関するものです。この二つの文章部分は同一ですが、見出しと写真には異なる点があります。新聞記事①、②の見出しと写真に注目して比較した場合、その説明としてふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい(記事本文を読む必要はありません)。

ア ①は「命」という言葉を大きくすることで、生きることの大切さを強調し、②は「転んでも立ち上がる」ことを見出しにすることで障害があっても日々を懸命に生きていくことを強調しているように読み取れる。

イ ①は三枚の写真によりココアのさまざまな様子を読者に注目してもらおうとしており、②は飼育員の写真も使用することで飼育員のコメントにも注目してもらおうように工夫しているように見える。

ウ ①は飼育員が「命とは日々の積み重ね」であることをココアから教えられ、②はココアは「転んでも立ち上がる」ためには「日々の積み重ね」が大切であることを飼育員から教えられたと書かれている。

エ ①はココアがこの動物園で飼育されているかは見出しには書かれていないが、②はココアが地元の北海道内の動物園で飼育されていることから、動物園の名前が見出しに加えられている。

① 「朝日新聞」東京本社発刊(2025年5月30日夕刊)

**命** とは 日々の積み重ね

アムールトラのココア、教えてくれる

後ら脚に障害を持って生まれたアムールトラのココア  
—2025年4月25日、釧路市動物園時、志田敦典撮影

アムールトラの飼育員、志田敦典(左)とココア(右)が、ココアの足元を覗き込んで見守っている様子。ココアは、後ら脚に障害を持って生まれたアムールトラのメス。ココアは、日々、飼育員から「命とは日々の積み重ね」と教えられる。ココアは、日々、飼育員から「命とは日々の積み重ね」と教えられる。ココアは、日々、飼育員から「命とは日々の積み重ね」と教えられる。

② 「朝日新聞」北海道本社発刊(2025年6月1日朝刊)

転んでも立ち上がり 17歳

釧路市動物園 脚に障害あるアムールトラ「ココア」

命とは日々の積み重ね 教えてもらった

アムールトラのココア(後ら)とタイガ(左)が、ココアの足元を覗き込んで見守っている様子。ココアは、後ら脚に障害を持って生まれたアムールトラのメス。ココアは、日々、飼育員から「命とは日々の積み重ね」と教えられる。ココアは、日々、飼育員から「命とは日々の積み重ね」と教えられる。ココアは、日々、飼育員から「命とは日々の積み重ね」と教えられる。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。

「私」は、小学校で図書館司書の仕事をするかたわら、休みの日には製本工房「ルリユール工房」でお手伝いをしている。

「じゃあ次の人、読んでください。山田ハルトくん」

それは、入学式の日に関書室を訪れた双子の兄弟だった。まるで測量士のように閲覧機の並びの歪みにこだわっていた子である。あの時読んでいたのと同じ、絵本『へんなどうつぶ』が彼の膝の上には置かれていた。

「がんばってね、ハルト」

隣に腰かけているそっくりな顔をした双子のタクトが、彼の耳元でこっそり囁いた。ハルトはおずおずと立ち上がると、絵本を開いて「ど……」とつぶやいたきり、言葉が途切れてしまった。彼はしばらく手に持った絵本を顔に近づけたり遠ざけたりしていたが、やがて絵本を机の上へ置くと、両手で懸命に文字を覆い隠しながら、

「ど、う、ぶ……つ、じゃ、な、い……。ぼ、か……」

と一音ずつ途切れとぎれに読み始めたのである。読み進めるたびに少しずつ両手を右へずらしているようだ。あまりにたどたどしいハルトの朗読に、クラスからはクスクスと笑いが漏れた。

「ハルトくん、そんなふうに字を隠したら読めないでしょ？ はい、手は本の上から離しましょう」

担任の先生に言われたハルトは、困った様子で手を引っ込めた。すると、今度はぎゅっと右目をつぶり、開いた方の左目に丸めた左手を当てながらスコープのように上から絵本を覗き込んで、

「ぼ、か、ど……、う、つ……、ぶ」

とやり始めた。周囲からはどっと笑いが起き、さすがに担任の先生も、

「ふざけてないで、真面目に」

と少し苛立った様子を見せた。すると隣の席にいたタクトがピンと右手をあげて立ち上がり、

「先生。ハルトは、字がたくさんになっちゃうとこまるんです。文字がうごいたり、ダンスしたりして、どこよんでたかわからなくなっちゃう。ふざけてなんかいいよ」

と言う。クラスは完全に笑いの渦うずに包まれた。

「もういいから、二人とも座すわりなさい」

先生に①たしなめられた二人は、しょんぼりとした様子で椅子いすに座った。「ハルト……」と心配そうに言いながら、タクトはハルトの固い握にぎりこぶしの上にそっと自分の手を重ねていた。

「——お話を聞いた限りでは、その子はディスレクシアの可能性があるかもしれません」

「ディス、レク、シア……？」

その日相談室を訪れた私の前で、スクールカウンセラーさくかきの榎先生は耳慣れない言葉を口にした。

「識字障害です。一般的な知能には問題がないのに、文字の読み書きにだけ困難をきたすというものです。文字が歪よこむ、滲にじむ、反転する、踊おどっているように見える。フォントの違いや、印刷のちよつとしたかすれや汚れなど、些細ささいなことが気になって読むのに集中できない……」

「あつ、それたしかに、ハルトくんが言ったことに当てはまるかも」

そんな障害が存在することを私は今まで少しも知らなかった。文字が歪んで見えるというのはどうということなのか、想像しようにも難しい。

「例えばこれが、ディスレクシアの人に見える文字のイメージですね」

そう言って榎先生が取り出した専門書のとあるページには、夏目漱石なつめそうせきの『吾輩は猫である』の有名な冒頭部分ぼうとうぶぶんが何パターンも記されていた。文字ごとに大きさも位置もばらばらで、文字同士が重なり合っているもの。ところどころ文字がひっくり返っているもの。渦うずを描くように歪んでいるもの……。知っている文章だから「吾輩は猫である。名前はまだない」と読めるものの、これを初見で読めと言われたら確かに困難だろうと思われる。

「なるほど、これは……。でも、ハルトくんが文字を隠そうとするのはなぜでしょう？」

「多くの文字情報があるほど混乱してしまうのです。人にもよりますが、余計な情報を遮断しゃたんすれば読みやすくなる場合があります。実際ディスレクシアの人のために、一行分だけの穴が開いたシート型の読書補助器具や、色つきの眼鏡が欧米では使われていると聞きます」

(中略)

製本家のいない製本工房ほど、侘しげなものはない。置き去りにされたかがり台、切り取られたままの厚紙、綴じられるのを待っている本……。

そこへ、玄関の扉をコンコン、と叩く音がする。私は気を取り直して立ち上がった。扉を開けるとその前に立っていたのは、見覚えのある一年一組の双子だった。

「こんにちは。あっ、司書さん！」

タクトが朗らかな声で言う。夏の眩しい日差しが彼の顔を照らし、ハルトの顔にはその影がかかっていた。

「あのね、君たち、ここは本をつくるお店なのだけど、何かご用ですか？」

「えっと、なつやすみのしゆくだいで、じゆうけんきゆうというものがあります。一ねん三くみのリサちゃんとショウタクくんが、ユリールこうぼうというところで本をつくってるよ、とおしえてくれたので、ぼくたちは本がすきなので、おはなしをきいてみたいとおもいました。よろしくおねがいます」

言い終わると、タクトは勢いよくペコリと頭を下げた。それを見てハルトもつられるように、ぎこちなく一礼をする。

「せっかく来てくれたところ申し訳ないけど、今、製本家の先生は二人ともお休みなの」

笑顔だった少年は、それを聞くと②にわかにがっかりした様子を見せた。

「えー……。司書さんは、本をつくらないの？」

「私はただのお留守番」

「おみせのなかは、みられないの？」

「それは見せてあげてもいいけど……」

「みせて！」

少年の目はきらきら輝いており、扉の隙間から垣間見える工房の内部に興味津津の様子だった。私はチラリと上目遣いをしながら、二階で休んでいる由良子さんのことを考えた。

「いいわ。一つだけお約束してくれるかな？ 図書室と同じで、工房の中ではお静かに」

「うん。しずかにしようね、ハルト」

タクトはひそひそ声でハルトに囁き、二人は向かい合って人差し指を口元に当て「シィーッ」というポーズをした。作業場の中へ二人を通すと、少年たちは口をポカンと開けて、初めて目にする製本工房への驚きに飲み込まれていた。

「これが本をつくるばしょなの？ ぼくはもっと、工場みたいなところだとおもってた」

「機械で本を作る工場もあるけれど、ルリユール工房では先生が一冊一冊、手作業で本を作っているのよ」

「ふうん、すごいや。ねえ、このそうちはなんですか？」

「これは『かがり台』といって、本を針と糸で縫い合わせるための……」

「あ、ちょっとタイム。十びょうだけまってください」

とタクトは私の話を制止し、そして「じゅう、きゅう、はち、なな……」とつぶやきながらゴソゴソとリュックの中を探り、ノートと鉛筆を取り出して熱心にメモし始めた。紙のこと、表紙のこと、綴じ方のこと……。

「いつもがあります。いっさつの本をつくるのに、なんじかんくらいかかるのですか」

「この工房では、お客さんからいろいろ難しい注文を受けることが多いし、先生はともこだわって一冊の本を作るの。だから、少なくとも一か月。数か月や、一年近くかかることも」

「いちねん……」

タクトは目を丸くして驚いている。

「その、一ねんかかる本は、その一ねんのあいだ、先生はまいにち、本をつくっているのですか？」

「っこりとうなずきながら、私はかつて自分が全く同じように、瀧子親方の前で驚いた日のことを思い出した。あの時は、一冊の本に何か月も、まして一年もかかるということが想像もつかなかった。けれども今では、少しずつ理解し始めている。製本とは日々の地道な、気の遠くなるような作業の積み重ねであり、製本家の **A** によって作られるものだということを。」

「すごいなあ。ぼくもいつか、本をつくってみたいな。じぶんで本をつくれるなんて、まほうみたいだす」

タクトが興奮している脇でハルトはずっと口をつぐみ、製本の機械や道具にも、美しいモロッコ革にも、マーブル紙にも興味を示す様子はなかった。

その代わり、彼は妙なものに目を留めていた。長方形の穴の開いたボール紙である。ハルトはそれを手に取って、片目をつぶったり、ボール紙を顔に近づけたり遠ざけたりしながら、四角い穴の向こうに見える景色を熱心にみつめていた。

「それはね、『窓あき文庫』用の厚紙。ここのおばあちゃん先生が考えたアイデアなの。こうやって、古い本の上に乘せると……。ほら、新しい表紙ができて、窓から本のタイトルだけが見えるでしょう？」

「あ、ほんとだ、おもしろいね」

すると、ハルトは急にしょっていたりリュックを下ろし、中からごそごそと一冊の絵本を取り出した。それはあの、『とべない鳥のしょくん！』だった。彼はページを開き、文章の印刷された上に窓の穴の開いたボール紙を置く。

「ねえ、ハルト、なにしてるのさ？」

彼はじっとそのボール紙の窓を凝視（まよかし）している。そして、ページの上に乗せた厚紙の位置を少しずつずらしながら、ハルトは絵本を読み上げ始めた。

「——あるところに、三匹のなかのいいとりたちがいました。」

あひるのガアブと、だちようのディーディー、それにペンギンのポンポンです。

ふつう、とりというのは、そらをじゆうにとびまわります。

ツバメだって、カラスだって、アホウドリだって。

でも、この三匹のとりたちは、りっぱなつばさがあるのに、ちっともぶごことができませんでした」

訥々（とつとつ）とした棒読みながら正しく文章を読み上げている。③ 驚いた。まるで別人のようだ。

「すごいすごい、ハルト、やればできるじゃん」

興奮気味に手を叩きながらタクトが言う。

（あ、これって、榊先生が言っていた……）

相談室で榊先生に教えられた「ディスレクシア」という識字障害のことを思い出した。反転した文字、滲みながら重なる文字、歪んで踊り出す文字……。余計な文字を隠せば読めるようになる子もいるし、そのための補助器具もあると榊先生は言っていた。もしかしたら窓あき文庫の「窓」が、ちょうどその役目を果たしてくれるのだろうか？

「ぼく、これが、ほしいんだけど……」

窓あき文庫のボール紙を手にしたハルトが、おずおずとした口調でこちらを窺（うかが）う。

「字をかくせば、ハルトの本はダンスしなくなるの。でも、おかあさんにいっても、しんじてくれない。文字がうごくわけないし、

ハルトはふざけてないで、もっとまじめにべんきょうしなさいっていう。

ウソじゃないよ。ハルト、ふざけてなんかいないよ。ぼくしってるもん。ねえ、司書さんは、ハルトのことしんじてくれるよね？」  
「ええ……」

「これがあったら、ハルトが本をよむのにやくにたつとおもう。ぼくたち、どくしょかんそう文をかかなきゃいけないんです。おねがい、司書さん」

タクトは黒い粒つぶのような瞳ひとみで私の顔をじっとみつめた。

「あのね、これは製本家の先生が作ってるものだから、君たちにあげてもいいですかって、ちょっと先生に聞いてくるね」

(中略)

「私」は製本家の由良子さんに頼たのんで、ハルトの症状しょうじょうに合う特別な「窓あき装置」を作ってもらった。

コンコン、と間仕切りを叩く音がしたかと思うと、扉下のフラップが開いてコトンと何かが差し出された。完成した窓あきの装置だった。

窓の周りには可動式の枠わくがあり、それを動かすと高さや幅はばを自由に調整することができる。その他には一切余分あまなものがなく、窓の中だけに集中できるデザインになっている。ただ一つだけ、裏側の下部にはこんな文字が記されていた。

④ これは世界の覗のぞき窓

「わあ、すごい。まどが、タテにも、ヨコにもひろがるよ。ハルト、よかったね。せいほんかの先生、どうもありがとう」

「……ありがとう」

すると間仕切りの向こう側から、

「あ、はい……あの……」

というたどたどしい返事が聞こえた。数秒の間を置いて、間仕切りの扉がゆっくり開かれたかと思うと、その陰かげから由良子さんがおずおずと姿を現した。一瞬いっしゅんだけ双子のほうを見たがすぐに目をそらし、俯うつむいたまま、

「……どういたしました」

と、聞こえるか聞こえないくらいの小声でつぶやいた。子どもたちが何か言ったり駆け寄ったりする暇もないくらい、すぐさま逃げように二階へ戻ってしまったのだが、たった一言にせよ、由良子さんが初対面の人間に面と向かって口をきいたのを私は初めて目の当たりにした。

「ねえハルト。もういっぺん、『とべない鳥のしょくん！』よんでみて」

「うん」

そこでハルトは再びリュックの中から絵本を取り出し、開いたページの上に「世界の覗き窓」を載せて幅と高さを調節すると、窓から見える文字を順番に読み上げた。

「——『そんなら、しみんプールへいこうよ』と、ペンギンのポンポンはいいました。

『あきやふゆになると、だれもプールでおよぐひとはいわないだ。

だから、そこでありったけ、とぶれんしゅうをしようよ。

あそこなら、だれもぼくらのことをわらわない。

とべないとりでも、できそこないだなんていわれない。

それにぼくらは、このまちの、れっきとしたしみんだからね』……」

この最後の言葉を読み終わらないうちに、<sup>⑤</sup>ハルトの目に涙が浮かんだ。

「ハルトくん……」

そう呼びかけた途端、私の目にも涙があふれてきて、どうにも止まらなくなった。ハルトはポロポロと涙を流して泣き出し、私も抑えようもなく泣き出した。

「ああ、もう、ハルトのなきむし！ 司書さんのなきむし！ こまったなあ、二人とも、ぼくどうしたらいいんだよ？」

タクトはその小さな手で、ハルトの頭と私の肘の辺りを、交互によしよしと撫でてなぐさめた。そうして私たち三人はしばらく、泣いたり笑ったりした。工房の外では蟬たちがミンミンと、それをかき消すかのような大音量で鳴っていた。

（坂本葵『その本はまだルリユールされていない』）

(注) \*1 由良子さん……製本家として「ルリユール工房」で働いている女性。人と関わるのが苦手である。

問一 ——— 線部①「たしなめられた」、②「にわか」の意味として最もふさわしいものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

①「たしなめられた」

- ア 驚かれた
- イ 注意された
- ウ 見放された
- エ 認められた

②「にわか」

- ア ほんの少し
- イ ますます
- ウ 突然に
- エ 一時的に

問二 A に入る言葉として、最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 細かさと効率
- イ 朗らかさと挑戦
- ウ 奇抜さと努力
- エ 誠実さと忍耐

問三

——線部③「驚いた。まるで別人のようだ」とありますが、ハルトがどのように変わったのですか。次の文の空らんにはふさわしい言葉を本文中からそれぞれの字数で書きぬきなさい。

識字障害を持っていると思われるハルトが、本の上に  
I (十三字) を置くことにより、  
II (十字) ることができる  
ようになった。

問四

——線部④「これは世界の覗き窓」とありますが、比喩表現が用いられています。この表現には、製本家の由良子さんのどのような思いが込められていますか。三十字以上、四十字以内で説明しなさい。

問五

——線部⑤「ハルトの目に涙が浮かんだ」とありますが、ここからはハルトのどのような変化が読み取れますか。文章全体をふまえて、ハルトの心情の変化を六十五字以上、八十字以内で説明しなさい。

問六

この文章を説明したものととして、**ふさわしくないもの**を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 会話文では、表記の仕方によって、登場人物が大人であるか、子どもであるかを視覚的にわかるように工夫している。
- イ 主人公である「私」の気持ちの変化を強調させるために、倒置法を多く用いている。
- ウ この文章に出てくる絵本『とべない鳥のしょくん!』には、ハルトを励まし、背中を押す効果がある。
- エ 人との関わりだけでなく、本や製本工房の道具との出会いによって、登場人物が成長する物語である。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。

### メタ認知の働き

みなさんにも、「弱ったな、どうしたらいいか全然わからないぞ」と思った経験があるのではないだろうか。例えば、数学の問題を解いているとき、外国語で話しかけられたときなど、自分にとって解決が難しい問題に直面したときに、よくこういう気持ちになりますね。逆に、クイズの答えが分かったときや、問題解決の糸口が見つかったときに、「わかったぞ!」とか「ああそうだ、これで解決できるぞ!」と嬉しくなった経験もあるのではないだろうか。

こういった経験は、私たちが自分自身の頭の中がどういう状態になっているかを把握しているということを表しています。「頭の働き」のことを「認知」と呼びますが、「わかった」とか「わからない」といった感覚は、私たちが自分自身の「認知」を把握しているということを指しています。「認知を把握する」ことも「頭の働き」ですから、これは「認知」の「認知」ということになります。この表現ではわかりにくいので、自分の頭の中がどうなっているかを適切に把握することは「メタ認知」と呼ばれています。「メタ」というのは「一段上の」という意味です。ですから、メタ認知は「(認知の)一段上の認知」という意味になりますね。

メタ認知をうまく働かせることは、さまざまな課題を実行したり、問題を解決したりするうえでとても重要です。数学の問題を解いているときの例でいうと、「わからない」ということに気づけば「違う解き方をしてみよう」とか「もう一回教科書の例題を確認しよう」といったように、自分の取り組み方を変更するきっかけを作ることができるからです。英単語や資格試験で必要な知識などを覚えようとしているときも、「まだ覚えられていない」ことがわかっていれば「もう少し勉強しよう」と勉強を続ける判断をしやすいですが、まちがって「もう大丈夫」と考えてしまったら「勉強は終わりでいいや」と判断してしまうでしょう。よりよい理解のためにはメタ認知が適切に働いて「わからない」ことが分かることが重要だと言えます。「わかった」「わからない」のような、頭の中の現状把握をする働きを、特に「<sup>①</sup>メタ認知的モニタリング」と呼んでいます。

メタ認知的モニタリングで「わからない」ことが把握できたとして、それで終わっては意味がありません。「違うやり方でやってみよう」と方向性を変えたり、「このままもう少し続けよう」と続行したりする判断ができることも重要です。このとき、自分の進む方向を指し示すような頭の働きは「<sup>②</sup>メタ認知的コントロール」と呼ばれています。

メタ認知的モニタリングとコントロールそれぞれがうまく働き協調することで、私たちはよりうまく問題に立ち向かうことができ

るのです。しかし、これがうまくいくためにはいくつか必要な知識があります。そのうちの一つが、「人に関する知識」です。たとえば、「電話番号を一回聞いただけで覚えるのは難しい」とか「睡眠不足だと頭が働かない」というような人間一般の認知のあり方について、あるいは「自分が一番集中して勉強できるのはリビングのテーブルだ」というような自分自身の認知のあり方の特徴についてわかっていることがモニタリングやコントロールに関わる「人に関する知識」です。

また、「課題に関する知識」も重要です。例えば、取り組もうとしている課題がどのくらい難しいかが分かることは、モニタリングをうまく働かせるためには特に重要です。

さらに、「\*」方略に関する知識も適切なモニタリングとコントロールには必要な知識です。ある問題を解くためにどのようなやり方ができるのか、今自分はそのようなやり方をしているか、どんなやり方に変更できるか、知識がなければ判断することができません。ここまで、メタ認知について、「問題を解いている状況」やなにか「解決したい課題があるとき」を念頭にお話してきましたが、文章を読んでいるときも、メタ認知の働きは重要です。たとえば、あなたが、ここまでの説明を読んで「なんだか抽象的でよくわからないな」と思っているとしたら、それは読解においてあなたの「メタ認知的モニタリング」が（おそらく適切に）働いているという証拠です。このモニタリングを受けて「もう一回読んでみよう」とか、「別の本に説明があるか見てみよう」「例えばどういうことか自分で例を挙げてみよう」などいくつかのやり方が思い浮かんだとすると、それは前に書いたような知識を使いながらメタ認知的コントロールが働いているということです。「わからない」ということが適切に把握できたとしても、その先どうするか、うまくコントロールするためには知識も必要であるということです。

メタ認知はうまく働いてくれるときばかりではありません。人はときに「わかったつもり」になってしまったり、自分がうまく理解できていないことを見逃したり、「わからないな」と把握しても「まあいいか」と放置してしまうこともあります。

たとえば、文章の中に明らかな矛盾があっても、その矛盾を無視してしまうというメタ認知的モニタリングの失敗が起こることがあります。子どもの認知についてたくさんの研究をしたマークマンは、小学校三年生に次のような文章を読ませて、こうした失敗が生じることを示しています。

アリは遠くまで出かけるので道に迷わないように特別な方法を使います。帰り道を見つけれられるように、目に見えない印をつけるのです。アリたちはどこかに行くとき体から特別な化学物質を放出します。この化学物質は目に見えませんが、特別な臭いが

あります。この化学物質の臭いを嗅ぐための鼻が必要です。アリに関してほかのお話をする、アリには鼻がありません。アリは、決して道に迷いません。

大学生はこのような文を読むとすぐに「おかしい」と気づきますが、小学生の多くは③この矛盾に気が付きません。この研究の面白いところは、「なにか筋が通らないところがあるかもしれません。筋が通らないというのはこういうことです」と説明してから矛盾を見つけるように指示すると、小学生も矛盾を見つけられるというところですね。つまり、小学生だから記憶力が少ないのだろう、とか矛盾することが理解できないのだろう、という推測は誤りで、「矛盾するところを見つけよう」という心の準備をすれば、適切にメタ認知的モニタリングを働かせることができるということです。

### 批判的読解におけるメタ認知

さてここで、本章のテーマである「批判的読解」について、\*<sup>2</sup>フレイクニュースや\*<sup>3</sup>疑似科学を目にした場面でメタ認知がどのように働くか考えてみましょう。

例えば、文章の中に矛盾がある場合や、自分の知識との矛盾が生じているような場合には、批判的に読むことは易しいように思われます。ですが、マークマンの実験の参加者のように、その矛盾を読み飛ばしてしまっただけで気が付かないということも十分起こり得ます。アリの文章について矛盾に気がついたという人も、矛盾する内容がもっと巧みに隠されていたら、それに気が付かないこともありそうですね。次のような文章はどうでしょうか。

ガン研究の世界的権威であるウィロウ博士は、「ガン細胞は人間の細胞から変異します。ですから、体はガン細胞も自分の細胞として認識してしまうのです」とその特徴を説明している。ガンの治療の難しさはこのようなガン細胞の特徴に起因しているのだ。ではどうすれば私たちはガン細胞に対抗できるのだろうか。ウィロウ博士は「免疫システムを良好に保つことが何より大切だ」と言う。免疫システムとは、簡単に言うとウイルスや病原菌などの異物から体を守るシステムのことだ。

なるほど、矛盾しているな、とわかった人が多いかもしれませんが、④この文章の矛盾に気がつくのが簡単であった理由はいくつか

ありますが、もっとも大きいのは、これまでの文脈において、「矛盾を見つける」という心の準備ができていたことだと考えられます。あなたが、健康情報について調べているときに先の文章を見つけた場合には、同じように矛盾に気がつくのが難しかったかもしれない。普段使わない難しい言葉が出てきたり、「ハーバード大学」のような権威が示されると、「間違いがあるかも」という心の準備はさらに難しくなります。(中略)

そもそも人はいつもきちんと<sup>\*4</sup>表象を構築する「理想的な読み手」でいるわけではありません。普段文章を何気なく読んでいるときに「なにか矛盾があるかもしれないぞ」と心の準備をしてメタ認知的モニタリングを働かせるというのはちょっと大変すぎます。わたしたちが「浅いレベルの処理で満足しやすい」ということを指して、「ほぼよい表象」と表現している研究者もいます。たとえば次のような短い文を読んでいるときのことを考えてみましょう。

モーゼは方舟はこぶねに動物のつがいに乗せた。

ここで、「変だぞ」と気がつかない人が多いのですが、皆さんはいかがでしょう。方舟の物語に出てくるのはモーゼじゃなくてノアなのですが、両者ともに聖書の登場人物で年を取った男性という特徴も共通しています。そうになると、記憶のネットワークの中の近いところに二人の人名があるため、違和感いわかんを持ちにくくなるのです。この場合、文章内には矛盾がないのですが、自分の知識との矛盾に気がつくことが課題になります。

私たちは、普段生活する中ではたいい「ほぼよい表象」で満足するような浅い理解しかしていないとすると、この例のように、自分の知識との矛盾に気がつくメタ認知的モニタリングは困難になります。フェイクニュースや疑似科学といった誤情報はSNSなどの短い文章で広められることもあります。このときにうまくメタ認知的モニタリングが働かないのは、その情報から「ほぼよい表象」ができてしまうので、知識との矛盾に気が付かない、メタ認知的モニタリングがうまく働かないという理由が考えられます。

誤情報に接した際の困難は、メタ認知的コントロールからも考えることができます。違和感に気付いたとしても、それでよい、という判断がなされれば、誤情報から作られた表象は変化しません。「なんだか違和感があるな」と気づいたときに、「モーゼ」「方舟」で検索けんさくしてみよう、とか、隣となりにいる人にも読んでみてもらおう、といった対応をしなければそれまでかもしれません。

誤情報に接したときに、メタ認知を適切に働かせるためには、心の準備をして「ほぼよい表象」では満足しないようにしなくては

なりません。そのときに必要になるのは、誤情報を読む際に関連する知識だと言えます。たとえば、「有名大学の名前がでてくると信じてしまいやすい」というような「人に関する知識」があることや、免疫についての知識（これは「内容に関する知識」ですね）があることが役に立ちそうです。またオンラインの場合は「ネットの情報の特徴」や「情報源に関する知識」があることが心の準備を助けてくれそうです（例えばガン細胞についての文章が、匿名のSNS投稿である場合と、大学の医学部のホームページに掲載されている場合では心の準備が違いますね）。また、違和感を覚えたときの対応方法をいくつか知っていれば、適切なコントロールが働きやすくなります。例えば、「まずは情報源を確認する」というような「方略に関する知識」があれば、モニタリングが適切に働きやすくなりますね。

（中略）

また、同じく認知心理学の研究者であるラップの実験では、「自由の女神の像はフランスからアメリカに送られなかった」というような、読み手の知識に反する誤情報を提示したときの読み時間を計測しています。誤った情報を読んでいるときの読み手の読み時間は、知識に沿った正しい情報（「自由の女神の像はフランスからアメリカに送られた」）の読み時間に比べると、少し長くなっていました。これは、読み手が「なんかおかしいな」と違和感を覚えているためであり、メタ認知的モニタリングが働いていると考えることができます。

ラップたちの実験では、誤情報の前に提示する情報が「知っている知識に疑問をもたせるような霧囲気」で書かれたときと、「知っている知識に沿った明確な霧囲気」で書かれたときを対比しています。つまり、自由の女神の例で言えば、「フランスは資金が乏しく、この計画が失敗に終わる心配がしていた」というように書かれた場合と、「フランスは資金が乏しかったので、寄付を募った。これにはアメリカの実業家も協力した」と書かれた場合を比べたのです。こうした文脈の提示のしかたが読み時間に与える効果は、正しい情報か誤った情報かで異なっていました。誤情報を提示したときは、**A** 霧囲気のように、正しい情報の場合には、**B** 霧囲気のように読み時間がそれぞれ速くなったのです。誤情報を読む場合も、正しい情報を読む場合も、そこまで構築してきた文章の表象にうまく当てはめられる場合にはすぐに処理ができますが、一致しない場合には時間がかかってしまうのです。

（犬塚美輪『読めば分かるは当たり前？ 読解力の認知心理学』）

(注)

- \* 1 方略……目的を達成するための具体的な方法や手段。
- \* 2 フェイクニュース……本当の情報のように見せかけた嘘の情報。
- \* 3 疑似科学……科学的に見えるが科学的な根拠がない考え方。
- \* 4 表象……心の中に思い浮かべるイメージや考えのこと。

## 問一

——線部①「メタ認知的モニタリング」・②「メタ認知的コントロール」がうまく働いている例として最もふさわしいものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 前日に遊びすぎて寝不足だった日に、「疲れていそうだね」と友人に言われる。
- イ 電車が遅延して遅刻しそうなので、バスに乗り換えて学校に向かう。
- ウ 誰にも注意されないの、周りを気にすることなく電車の中で大騒ぎし続ける。
- エ スキーを一度もやったことがないが、なんとなく苦手だと感じるのでやめておく。
- オ 先生から返却された答案を見て、勉強時間が不足していることに気がつく。

## 問二

——線部③「この矛盾」・④「この文章の矛盾」の説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア ③ではア리가道を迷わないためには特別な臭いがある化学物質を放出していると書いているが、鼻がないと言っている点で矛盾している。また、④では体が自分の細胞とガン細胞を区別することができないと書いているのに、免疫システムを良好にすればガン細胞に対抗できるという点で矛盾している。
- イ ③ではアリは仲間の体臭からの道に進めばいいかを把握していると書いているが、アリには体臭があることが証明されていない点で矛盾している。また、④ではガン細胞はガン患者の細胞の一部であるのに、異物を取り除く免疫細胞で対抗しようとしている点で矛盾している。
- ウ ③では鼻のないアリが、特別な臭いを放出する化学物質を用いて道に迷わないようにしていると書いている点で矛盾している。また、④では矛盾している点はどこにも見当たらないにも関わらず、筆者がわざと矛盾があると言っている点で矛盾している。

